

日本人とポジティブ・ポライトネス：学生のレポートの分析

著者	堀 素子
雑誌名	研究論集
巻	85
ページ	179-194
発行年	2007-03
URL	http://doi.org/10.18956/00006239

日本人とポジティブ・ポライトネス

——学生のレポートの分析——

堀 素子

要 旨

本論文は、平成17年度に担当したゼミナールⅡの「社会言語学」と共通科目の「言語学」で、ポライトネス理論の一部を指導した結果を学生のレポートを中心に報告する。ゼミのクラスでは英語で、共通科目のクラスでは日本語の概説で、ブラウンとレビンソンの理論のうち特にポジティブ・ポライトネスを抽出して講義した。学生は不十分なながらも一応この理論を理解したという前提で、以下のレポートを課した。

英語を原語とする映画等からポジティブ・ポライトネスを示す会話を取り出すことを課せられたゼミ・クラスは、生の英語を聞き理解し説明する作業を繰り返したために、英語を生きた言語として捉える態度が生まれた。

また日常の日本語会話の中にポジティブ・ポライトネスを見つけるように指示された共通科目の学生は、あるストラテジーは日本語の会話には見つけにくいことに気づき、日英の対人関係のあり方が言語使用に大きく影響していることを発見した。

キーワード：ポライトネス、対人関係意識、会話分析、英語教育、日英比較

本稿では、平成17年度に本学で担当したクラスにおいてポライトネス理論の一部を指導した結果を学生のレポートを中心に報告する。ポライトネスを指導したクラスは、ゼミナールⅡの「社会言語学」と共通科目の「言語学」である。本稿の構成は、第1章各クラスの紹介、第2章ゼミ・レポートの分析、第3章言語学レポートの分析、第4章全体の考察とする。

1. クラスの紹介

1. 1 ゼミナールⅡ「社会言語学」

このゼミは外国語学部英語専攻4年生の選択必修科目で「社会の中で人間が使う言語」を研究の対象とする。学生数は26名で全員が3年次から続けて履修している。3年次には学生の視

野を広げるために「多言語社会における言語使用」を中心にテキストを読んだ。学生にはグループ別に興味を持った地域の社会と歴史とそこで見られる言語問題をクラスで報告させた。4年次前期には「人間が使用する言語」を中心に、文化や社会が違ってても言語使用の際、人間として共通に見られるものは何かをテーマとして同じテキストを読んだ。後期には特に Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論のポジティブ・ポライトネスの部分を読んだ。後期の課題としては、原語に英語が使用されている映画を見てポジティブ・ポライトネスがどのように言語使用に表れているかをレポートにまとめさせた。テキストは、3年・4年を通して Janet Holmes, *An Introduction to Sociolinguistics*, Second Edition. Pearson Education (2001) を使用し、4年の後期に Penelope Brown and Stephen C. Levinson, *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press (1987) の Positive Politeness の部分を読んだ。

1. 2 「言語学」

この授業は外国語学部2年生以上の選択科目で、登録時には147名いたが後期には137名となり、最後のレポートは105名が提出した。受講生は必ずしも英語専攻の者だけではないので、テキストは日本語で書かれたものを選んだ。前期は特に日本語を中心に地域社会での言語変異について資料を配布しながら講義し、レポートには各自の方言あるいは親しんでいる言語使用（インターネット上の言語をも含む）を客観的に記述させた。後期は他言語における言語使用とそれに関する理論の紹介を中心に講義した。最後の2-3週は Brown and Levinson のポジティブ・ポライトネスの要点を説明し、このような言語使用の概念や態度が日本語の会話にも見られるかどうかをレポートにまとめさせた。テキストは、田中春美・田中幸子編著『社会言語学への招待』ミネルヴァ書房（1996）を使用し、後期の終わりに Brown and Levinson の Positive Politeness 理論を日本語に簡略にまとめたものを配布した。

2. ゼミ・レポートの分析

2. 1 レポートの目的

「社会言語学」は社会全般に見られる広範囲な言語現象を扱うと同時に、個人間の会話に見られる言語現象をも研究の対象とする。後期のレポートはこの個人間の会話を中心に、英語での会話の実態を知ることが目的とした。すなわち学生は各自で自由に英語を原語とする映画・TVドラマを選んで、そこにポジティブ・ポライトネスの15のストラテジーがどのように使用されているかを見つけて報告した。

2. 2 ゼミ・レポートから学生が得たもの

外国映画を英語で聞き取る、というのはかなりの労力を要したらしいが、全員がポジティブ・ポライトネスを表現していると思われるセリフをたくさん集めていた。登場人物の人間関係がストーリーの展開にもなって変化するとそれが言語使用にはっきりと現れることがわかり、学生たちはその変化をくわしく書きとめ、それぞれの人物のセリフの意味をポライトネス的視点から分析している。このような手間のかかる作業を経て、彼らは英語での会話の展開・人間関係と言語表現など、通常の英会話の授業ではあまり触れる機会のない英語の実態に触れることができた。映画の中ではあるが人間と言語の関係を疑似体験することによって英語を生きた言語として見る態度が生まれた。同時に自分の言語である日本語を客観的に観察する目も開かれたようだ。学生が使用した映画資料は次の通りである。

You've Got M@il; Life As a House; Maid in Manhattan; America's Sweetheart; Die Hard; The Bodyguard; Rain Man; Catch Me If You Can; Vanilla Sky; I Am Sam; Shrek; Sex and the City; Ocean 11; Romeo and Juliet; Holliday in Rome; Secondhand Lions; Back to the Future; Sister Act; Two Week's Notice; The Sweetest Thing; Four Weddings and a Funeral; Love Actuary; Hitch; Friends

2. 3 学生の反応

学生たちはまずポジティブ・ポライトネスを表していると思われる会話を人間関係・周囲の状況などの記述と共に収集した。同時に彼らは英語を耳で聞きながら映画を見るという体験から、英語自体についてまた日本語との関係についてそれまでとはちがった感想を持った。本稿ではその感想を紹介することによって、ポライトネスの授業の成果を報告したいと思う。彼らの感想をまとめると以下の5項目となる。以下、各項目について学生の反応を引用する。

1. 日本語と英語とのポライトネス概念のちがいがわかった。
2. 日本語と英語とで共通するストラテジーがある。
3. 英語の勉強にプラスになった。
4. 映画の見方が変化した。
5. 異文化理解への道を開くよい方法である。

2. 3. 1 ポライトネス概念のちがい

ブラウンとレビンソンは普遍的理論として彼らのポライトネス理論を提示しているのであるが、やはり西欧的発想に基づいた色彩が濃いことは認めざるを得ない。なかでも日本語との一番大きな差は、日本語は距離を開けることで敬意を表現するのに対して、英語は距離を縮めることでポライトネスを表現することであろう。それは次のような学生のコメントによく現れて

いる。なお各学生の性別を男子M・女子Fで示す。

1-1 (F)

日本とアメリカのコミュニケーションの差を知ることが出来た。特に英語はファーストネームや冗談やほめことばで相手に近づこうとする一方、日本語は心理的距離を保つために敬語や丁寧語を使う。日本が上下親疎で敬意を表すとすれば、英語は連帯関係で敬意を表すといえよう。

1-2 (F)

欧米人はよくジョークを言うと言われるが今回の映画にもたくさん出てきた。日本人の言うくだらないジョークではなくて、人間関係を築く上での大切なツールであることがよくわかった。

1-3 (F)

「ポライトネス」は日本語の「敬語」とは違うということはわかっているけど、距離を縮めようとする行為とポライトネスという言葉とがなかなか結びつかなかった。

1-4 (M)

日本人の日から見るとポジティブ・ポライトネスは、でしゃばり・大げさな返事・あやふやな返事・わかったような口を利く・社交辞令・言い訳など、マイナス・イメージになってしまふ。おそらく日本語にはこのような態度をプラス・イメージで表現する言葉が無いのであろう。

1-5 (F)

やはり日本にはポジティブ・ポライトネスは存在しないことを感じた。日本では有り得ないことが欧米ではふつうに起こっているなんて、文化の違いをひしひしと感じる。欧米人はなぜあそこまでポジティブな態度でいられるのか？多分Faceを脅かすことを最も恐れているからかもしれない。

1-6 (F)

彼らのほめことばは、本心のこともあるだろうがお世辞なんだと思っていたが、今回レポートを書いてみてこれは彼らのポライトネスなのだということがわかった。英語はフランクな言語だと思っていたが果たしてそう言い切れるだろうか？

1-7 (M)

人気TVシリーズ「ビバリーヒルズ高校白書」の英語では年齢に関係なく仲良く話しているのに、日本語の吹き替えでは年齢に応じて敬語を使い分けている。NHKで放送したので教育的な目的でそうしたのではないか。日本とアメリカの社会の違いがよくわかった。

2. 3. 2 日本語と英語とで共通するポライトネス

日本語と英語とで共通するポライトネス・ストラテジーがあることを感じた学生は次のような感想を述べている。

2-1 (F)

「相手の立場に立って話す」「協力的な態度を取る」など「相手に中心を置く」ストラテジーの基本概念はどの言語にも通じるものがあると思う。

2-2 (F)

映画の中の会話を見て、ふだんの会話でも人は互いのFaceに気を配っていることがわかった。これをポジティブ・ポライトネスというのなら、日本でも日常的にしていることであることに気づいた。

2-3 (M)

言語は国や文化によって使われ方は違うものの、話し手と聞き手が互いに尊重しあう姿勢は同じなんだと感じた。日本人は距離を置くことで相手に敬意を表すが、外国人は逆に距離を取っ払うことで敬意を表し、距離を置くことは相手を遠ざけることになるのだと感じた。

2. 3. 3 英語の勉強にプラスになる。

英語能力の向上に役立ったと感じた学生も数多くいた。下にその代表的な感想を記す。

3-1 (M)

今まで映画はなんとなくストーリーを追っただけだったが、今回1つ1つの会話に注意して見たので映画の深いところまで理解できたと思う。話し手・聞き手の気持・FTAの有無なども少しは分かった気がする。英語を使う上でこれが活かされればいいと思う。

3-2 (M)

この15のストラテジーはポジティブ・フェイスに関するものであり、ネガティブ・フェイスにもこのようなストラテジーがあるのかと思うと、英語の奥深さに驚かされた。

3-3 (F)

日本文化ではなじみの薄いポジティブ・ポライトネスだが、映画の中にこんなにもふんだんに使用されているとは知らなかった。しかし今回この研究をしたことによって、さまざまな場面で使える便利な会話方法だと感じた。

3-4 (F)

こうしてアメリカ映画の会話を分析・考察することで、日本語と英語の違いがよくわかり理解するきっかけを作ることが出来て嬉しく思う。

2. 2. 4 映画の見方の変化

これまでとは違った態度で映画を見るようになったという学生も多数あった。

4-1 (F)

今までも映画は好きだったが今回のような見方をしたことは無い。じっくり時間をかけて見えてみて、1つ1つの会話にいろんな発見が出来て面白かった。このレポートは大変だったけど必ず自分の役に立つと感じた。

4-2 (F)

何度も見ているうちによりやく「ここで距離を縮めようとしている」というのがわかるようになって、映画の見方が断然変わってきた。

4-3 (F)

ポライトネス・ストラテジーに当てはまるセリフを探す際、日本語の字幕だけを見ても見つからなかった。日本語はかなりの短文にまとめられているので、英語字幕と両方を見ながらの研究となった。そしてセリフとストラテジーを比べてみると会話のほとんどがポライトネスの塊だった。

4-4 (M)

映画は今まで字幕ばかり見ていたが、これをきっかけに英語を聞く楽しさを実感した。ポジティブ・ポライトネスはブラウンとレビンソンが述べているように、日常会話の中で自然に行っていることだった。それに気づいただけでもよかったと思う。

4-5 (F)

今回、授業では習うことのできない若者言葉や少し下品なスラングの使い方を知ることが出来た。これまでは日本語の吹き替えを好んで見ていたが、このゼミとレポートをきっかけに、字幕でさまざまな英語表現を聞く方が楽しくなった。これからもたくさんの映画を見て、パリエーションに富んだ英語表現を学んでいきたい。

2. 3. 5 異文化への理解

これは意図しなかった成果であるが、英語の会話をポライトネスの視点から分析することで、日本語の会話とは異なる点を多く見出し、そこから異文化コミュニケーション・異文化理解の方に興味を広げていった者もある。

5-1 (F)

ある文化では距離を「保つこと」に価値を見出す一方、他の文化では「縮める」ことに重点を置く。大事なことはどちらかが優れているということではない。文化によって違う形で表

現されることを認識し楽しむことが大事なのだ。

5-2 (M)

何気ない一言に多くの意味や意図が含まれていることに気づいて驚いた。今回学んだことは、外国語を話すときはその言語や文化が持っているしきたりに従うのがよい人間関係を築くことになるということだった。これからは今まで以上に表現に気を配れるようになりたいと思う。

5-3 (F)

現在世界では国際化が進んでおり、これからあらゆる国々の人とコミュニケーションをとる機会が増えるだろう。その際、言語の違い・文化の違いを理解し、相手を尊重する姿勢が求められる。そのためにポジティブ・ポライトネスという概念を習得する必要があるのではないか。英語教育にこの視点が加わることを期待したい。

2. 4 ゼミ・レポートの考察

多くの学生がポライトネスの視点から映画を見ることによって、通常の英会話のテキストでは扱われないような会話に多く出くわしたという。映画という物語の中で会話を聞くことによってそれぞれの発話がどのような人間関係を表すのか、どのような愛情や葛藤を表すのかを知ることができ、それを通して英語が日本語と同様、人間の喜怒哀楽を表現する生きた言語であることを実感したと述懐している。

同時にそれらの会話の背後には、英語圏社会が持つ暗黙の約束ごとがあることも理解したようだ。ブラウンとレビンソンはその約束ごとの一部をポライトネスという語でまとめたのであるが、学生はそれを学習することによって、将来、英語を使って外国で、あるいは外国人と接触・交渉などをする場合に、注意しなければならない事柄にも気づいたし、またそのことを深く考えなければならないことにも気がついた。

将来彼らが国際人として活躍する際、このレポートで得た新しい知識と言語感覚は非常に大きな力となって、彼らの活動を助けてくれるにちがいない。

3. 「言語学」レポートの分析

3. 1 「言語学」後期レポートの目的

後期の最後の数週間で、英語の底流を流れているポライトネスの要点を説明した。それをもとにして「ブラウンとレビンソンのポジティブ・ポライトネスは日本語にも見られるか」というテーマでレポートを書かせた。

3. 2 「言語学」レポートから学生が得たもの

学生たちがポジティブ・ポライトネスという用語とその意味に触れたのはこの講義が始めてであったと思うが、その意味は意外にすんなりと理解したようであった。それはおそらく彼ら自身の会話が、無意識ではあってもポジティブ・ポライトネスに満ちたものだからであろう。むしろそのような日常的な会話が「ポライトネス」という用語で括られることに意外感を覚えた者もあった。

学生は日本語の日常会話を収集し、それをポライトネスの視点から分析したのであるが、それによって自分たちの会話を客観的に見ることができた。そのうえで、ブラウンとレビンソンのポジティブ・ポライトネス・ストラテジーのうち、日本語の会話でもよく使われるストラテジーとあまり使われないストラテジーがあるのに気づいた。こうしてポライトネス理論を日本語話者の視点から見ることによって、日本語の敬語とブラウンとレビンソンのポライトネスとは一致しない点があることに気づいた者もあった。

3. 3 各ストラテジーに対する学生の感覚

15のストラテジーのうちには、学生が「違和感を感じる」としたものと、「違和感を感じない」としたものがある。ここに米国人であるブラウンとレビンソンと、日本人である学生たちの文化的な感覚の違いが現れているといえよう。

3. 3. 1 「違和感を感じる」ストラテジー

学生はポジティブ・ポライトネスについてはほぼ理解したはずであるが、彼らの脳裏には日本社会の規範が無意識のうちに刻まれていて、社会で尊重されない態度を「ポライトネス」という用語で括ることに抵抗があるらしい。

たとえば、ストラテジー11 **‘Be optimistic’**「楽観的であれ」を説明する際、ブラウンとレビンソンを引用して「相手に FTA をする際、それをするを相手自身も願っているかのよう

に言う。例えば芝刈り機を借りたいとき “You’ll lend me your lawnmower for the weekend, I hope” のように言う。これはお互いが協力し合う関係にあることを認識しているという前提に立っている」としたのであるが、これには「違和感を感じる」という者が105名中36名もあった。

このように、相手を自分の中に引き込むような態度は日本では無礼な態度とされているのであろう。学生が集めた多くの会話の中でこれに相当するのは以下の例1つだけであった。

例1. 友人間の会話（男性同士）

「よういや、おまえ、これ、前、貸してくれるっていったから貸してもうで!!」

次にストラテジー14 ‘Assume reciprocity’「相互依存関係・相互利益があると想定する」の説明は「話し手と聞き手は互いに協力することを前提に“‘I’ll do X for you if you do Y for me’”のような形で相互条件を出す。これによって貸借の負い目や批判・不満のようなFTA的側面を緩和する」としたが、これに「違和感を感じる」とした者は21名あった。

これに入ると思われる会話はかなり多く報告された。しかしそれらはすべて親しい友人・家族間か上下関係がはっきりしている間での会話で、その中には以下のようなものがあった。

例2. 姉妹の会話

「あたしがお皿洗うけえ、姉ちゃん洗濯干してえな!!」

例3. 店長A（43歳）と、隣の創作料理屋のマスターB（30歳）の会話（上下関係あり）

A「やっさん、あたしそれやっとくから、ちょっとこれ買ってきてや」

B「全然いいですよ。じゃー買ってくるんでこれやっててくださいね。やり方わかります?」

このほか、ストラテジー8 ‘Joke’「冗談を言う」に対しても18名の学生が「違和感を感じる」としている。会話例は下の2例のみであった。

例4. 真っ赤なコートを着てきた友人Aに対する発話（女性同士）

B「目が痛いわ!」

C「絶対、牛突っ込んでくるで!」

例5. Aが親しい友人Bの家に行った時の会話（男性同士）

A「ただいまじゃなくてお邪魔します」

B「何でただいまやねん。ここはA家か」

A「いや、植民地。うそうそ」

ストラテジー1 ‘Notice, attend to H (his interests, wants, needs, goods)’「相手の興味・要求・持ち物などに注意を払う」は「たとえば、相手が鼻水をたらしているときに気づかないふりをするのがネガティブ・ポライトネスで、ティッシュをさしだして気遣うのがポジティブ・ポライトネスである」と説明したが、これには相反する態度が見られた。その理由は「本人にとって恥ずかしいことは見て見ぬふりをする」というもので、友人同士であっても注意するのは躊躇するという意見が多数あった。これは相手の内部には立ち入らないという日本的遠慮の気持からであろう。16名の学生が「違和感を感じる」としたのはそのためであろう。

一方「親しい友人には何か変化があればそれに気づいてあげる」と受け取った者も多く、そ

の類の会話は数多くある。それはこのストラテジーをポジティブ・ポライトネス本来の意味に理解したからであろう。ここでは2つの例のみを示すが、類似の会話は多数あった。

例6. 友人が新しいスカートをはいて来た時

「今日のスカート、素敵やね。それ日本で買ったん？」

例7. 食事後、友人の口にソースがついたままになっているのに気がついて

「あ、Bちゃん、口にソースが付いてるよ。ほら」と鏡を差し出す。

その他、数としては少ないが学生が否定的な反応を示したストラテジーには次のものがある。学生の理由も付加する。

ストラテジー12 **'Include both S & H in the activity'** 「相手を共に行動する協力者であるとする」は、強引な感じがするので「違和感を感じる」という者が5名あった。このストラテジーで頻繁に使われるのは英語では Let's とか Shall we であるが、それに当たる日本語は「～しよう」であろうか。この表現は多くの例があった。

例8. 友人同士。同じ行動をするように誘う。

「ほんまに。めぐ、トイレ行こっか？」

例9. 医者が患者の子供に、いっしょに注射をされるかのごとく話す。

「さあ、じゃあ注射しよっか、はい、おてて出してみようか～」

例10. 教師が生徒に、自分もいっしょに問題をやるかのごとく話す。

「はい、じゃあみんなでこの問題を解いてみよう！」

ストラテジー15 **'Give gifts' to H (goods, sympathy, understanding, cooperation)** 「相手に贈り物（品物・共感・理解・協力）を与える」は時にいやらしいとして「違和感を感じる」とした者が3名あった。しかし下のような会話からはそのような感じは受けない。おそらく下心のある贈り物について「いやらしい」と感じるということであろう。

例11. お昼にマクドナルドに行く友人同士。しかしAはお金をあまり持っていない。

A 「どれにしようかな～・・・私すごい金欠やねん、今（泣）」

B 「あ、私クーポン券持ってるから使っていいで」

例12. おじ（50代半ば）がお歳暮を持ってきたとき、母（50代前半）との会話

おじ「こんにちは」

母「あ、いらっしゃい」

おじ「お歳暮もって来ました」
母「まあ、いつもありがとうございます」
おじ「毎年おなじものですが」
母「いただきます」

3. 3. 2 「違和感を感じない」戦略

上とは逆に、日本語でも親しい間ではよく使うので「違和感を感じない」という戦略もいくつかあった。それらは戦略4、5、6で会話例も多かった。ブラウンとレビンソンではこれらは次のように説明されている。

戦略4 ‘Use in-group identity markers’

「呼称・方言・スラングなど仲間内だけで通じる語を使用する」

戦略5 ‘Seek agreement’

「話し手・聞き手が共通の立場になるよう、無難な話題を選び対立を避ける、なるべく同調する」

戦略6 ‘Avoid disagreement’

「相手に不同意・反対でもそうとはっきり言わないで、見かけは同意するような言い方をする」

このうち、戦略4については2名の学生が、ファーストネーム（FN）を上司に使うことはできない失礼だ、として「違和感」を唱えた。しかし友人間ではもっぱらFNやニックネームは日常的に使われているので「違和感」は無い。ただ、友人間でも互いの親密度によって名前の中のどちらを呼ぶか、サンとかチャンを付けるか否かで距離を調節していることはわかる。

しかしこれらの戦略になぜ多くの学生が「違和感を感じない」といえば、これらはいずれも相手との協調・同調・共存を目指しているために、日本的な「和を尊ぶ」精神によく合致するからであろう。しかし学生たちが集めた会話を見ると、単に「お互いに調子を合わせているだけ」ではないかと思われるものもある。あるいは調子を合わせないと仲間はずれにされる危険があるのかもしれない、といういわゆる「付和雷同」的な態度がこれらの戦略にあてはまると思ったのではないか。

もしそうであれば、ポジティブ・ポライトネスとは根本的に異なる。日本人学生がポジティブ・ポライトネスと思った言語行動は、表面的には相手に親しさを示して積極的に近寄る態度のように見えるが、実は自分を防御しているのではないか。もしかするとこのような行動は日本社会に広くはびこっている「長いものに巻かれる」的発想、あるいは「全員一致」を善しと

する社会通念の延長線上にあるのではないか。

彼らの会話はいわば仲のよいところを競ってみせる「仲良しクラブ」のような感じで、もし学生たちが無意識のうちに相手を傷つけまいとして衝突を避けるために安易に同意しているとしたら、これはポライトネスとはまったく逆の方向に向かっていることになる。この点について日本語の若者ことばをポライトネス理論から分析する際にしっかり注意する必要がある。

彼らが集めた会話例を見てみよう。いずれも同位者である友人間の会話である。

例13. ストラテジー4 (省略語を使用している。カッコ内がその説明)

A「マクド(ナルド)行かない？」

B「うーん、でももっとガッツリ食べたいからビクドン(びっくりドンキー)にしようよー、近いし」

A「えー、今めっちゃダブチ(ダブルチーズバーガー)が食べたい気分なの！」

例14. ストラテジー5 (共通の話題を持ち出し、共通の行動をとる)

A「今帰り？」

B「うん、一緒に帰っていい？」

A「いいよ！帰ろ帰ろ～」

例15. ストラテジー5 (共通の話題を持ち出し、共通の行動をとりたい意志を示す)

A「卒業旅行でイタリア行くんですよ」

B「イタリア！？いいなあ、私も行きたいわあ」

例16. ストラテジー6 (意見が違ってもすぐに反対しないで、一応賛成の態度を見せる)

「寿司か…いいな。あっそや、守山の“シルク”も良くない？かなりおいしいらしいで！」

例17. ストラテジー6 (意見が違ってもすぐに反対しないで、一応賛成の態度を見せる)

先輩Aが最近できた彼氏の写メールを見せたとき、後輩Bの発話

A「どう？ カッコいいでしょ」

B「優しそうですね(カッコいいとは思わなかったし、嘘も言えなくて)

そのほか、大げさでいやみな感じがするとした者も8名あったが、特に違和感を感じるとして挙げられなかったものに、ストラテジー2 '**Exaggerate (interest, approval, sympathy with H)**' 「相手への興味・承認・共感を強調する」がある。これらは彼らの間ではかなり頻繁に見られるのであろうか。若者同士ではこのようなおおげさな見え見えのお世辞がすでに共通語になっているのであろうか。ここでは2例のみ記すが実際には多くの発話が記録されていた。

例18. ストラテジー2

「ほんまかわいいやんなあ！モデルみたいやし！！なんでそんなに上手くできるん??
どうやってるん??」

例19. ストラテジー 2

「ばりええやん！！どこで売ったん??ばりしぶいやん！」

ストラテジー 3 ‘Intensify interest to H’「話を面白くするために聞き手と同じ視点から話す」
のは、相手が上の場合には失礼にあたる、として「違和感」を唱えた学生が2名あったが、下の例のように猛烈に interest を示す例もあった。もっともこれはブラウンとレビンソンが言っているストラテジー 3 とはやや異なるが、相手への興味を強調していることはまちがいない。

例20. ストラテジー 3

大学のクラブ館で20歳の女子と22歳の男子が話しているとき、男子が入れた合いの手の数々。

「なんやなんや?」「なんや??はよ言え!」「ふん、それで?」「おお！ついにひかれてしまったか！なんて送りよったんや??」「おお!! こいこい!!」「なんやなんや?」「うお～!!」「まじで?!」「・・・うぎゃあ～!!」

ストラテジー 9 ‘Assert or presuppose S’s knowledge of and concern for H’s wants’「相手の要望をよく承知していてそれに配慮していることを示す」というのは、おそらく日本的思いやりとか配慮の気持に添うので学生には受け入れやすいのであろう。下の例に示すように、このような態度はいろいろな関係に見られるので、もしかすると一番日本的ポジティブ・ポライトネスなのかもしれない。

例21. 友人同士の会話。

「Bってカラオケ嫌いやねんなあ？今度の金曜に皆で行こうって話があるねんけど、Bも行かへん～??イヤ??」

例22. 母親56歳と兄23歳の食事時の会話。

母「あんた、次の日曜はなんか用事あんの？」

兄「用事はないけど、レポート書かなあかんなあ」

母「そうかいな、次の日曜な、おじさんが田舎から出てきはんねん。ほんでちょっと駅まで車で迎え行ったらってほしいねやわ」

兄「あ～、そうなん・・・」

母「あんたも忙しいやろけど、ちょっと頼まれたってくれへん？」

ストラテジー10 'Offer, promise' 「たとえ形式的にせよ、相手への協力を申し出る、約束をする」のもぎわめて日本的である。下のような会話は日常的によく聞かれる。

例23. 恋人同士の会話

「そうだな、最近全然会ってないなあ… よし、今度の休みにどこかドライブに連れて行くよ」

例24. アルバイトの学生がアルバイト先の上司に

「何か手伝うことないですか？」

ストラテジー13 'Give (or ask for) reasons' 「相手に FTA を行うときに、それが相手にとっても望ましいものであるという理由を示す」のは少し相手の中に入りすぎの感があるが、下のような例を見ると日本語でも頻繁に使っているストラテジーであることがわかる。

例25. 母親と娘の会話

母「暖房もう切つといて。つけっぱなしにしてたら体に悪いから」

娘「はい」

例26. 家で兄に自分が見たいテレビを見させてもらうとき

「みんなが見たがってるから、こっちの番組つけてもいいかな??」

3. 4. 「言語学」レポートの考察

ブラウンとレビンソンのポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの簡単な説明をただだけで、学生にそれを具体的に示している日本語の会話を集めさせたのであるが、意外に彼らは現実に多くのポジティブ・ポライトネス的会話をしていることがわかった。このことはほぼ予想していたが、これほどまでに学生がポジティブ・ポライトネス的思考を持っているとは思わなかった。

この理由の一つはアメリカ的親密な話し方が日本の若者に浸透しているということであろう。特にテレビのコマーシャルでは親しげに話しかける調子が大半を占めていて、視聴者に向かって敬語を使うのは極めて少ない。その方が商品のターゲットである若者に親近感を持たれて、売り場での選択を有利にすると考えられているのであろう。つまり日本社会における言語使用・言語選択にはすでにポジティブ・ポライトネスが定着しているといってもよい。

しかし一方で学生が「違和感を感じる」としたストラテジーは、上下関係を重視し距離をあけて対応する日本的な態度になじまないものであった。特に相手の内部に入り込むことには抵抗があり、たとえ親しい友人に対してもかなり遠慮がちで、どこまで踏み込むかは各個人の判

断によるらしく、共通した態度は見つけにくかった。そのため親密さを強調しながらも最後のところで距離をあける態度が見られて、真の意味でのポジティブ・ポライトネスにはまだ遠い感じもある。

これらを総合すると、現代の学生は意識の底に伝統的価値観を持ちつつも表面上は明るくほがらかに親密な会話を交わしているらしい。もしも真に親しい間柄でなくても親しい関係を誇示するために親密な会話をしているとしたら、それこそブラウンとレビンソンのいうポジティブ・ポライトネスそのものである。世界から、日本社会はネガティブ・ポライトネスの見本のようだと思われるが、このような学生の会話を分析してみると、いまやポジティブ・ポライトネスの方が彼らの中では重要な機能を持っているのではないかとさえ思われる。

4. 考察

本報告は、ブラウンとレビンソンのポライトネス理論に基づいて映画から英語の会話を収集分析したゼミのレポートと、日本語の日常会話を収集分析した「言語学」のレポートをまとめたものであるが、それぞれ多くの収穫があった。

まずゼミ・レポートでは、学生は映画の登場人物がさまざまな場面で使用する英語をポライトネスの視点から分析することによって、通常の英会話学習では得られない会話の実態を体験した。同時に英語を文字面だけでなくイントネーションなどの音声および表情・身振りなどの非言語情報から理解することの重要性を実感した。そしてそこに英語も日本語と同様、話す人・聞く人・その周囲の人などの複雑な関係によって表現が変化する「生きた言語」であることを知った。受験の対象でしかなかった英語をこのような視点から分析することによって、さまざまな場面で自分も使用できる言語であるとわかったのは、彼らにとって大きな収穫であったといえよう。

「言語学」のレポートでは、学生自身の会話が多くの収集され、現代若者ことばのよい例となった。彼らは簡単にではあるが一応ポジティブ・ポライトネスを学んでから会話の収集に当たったので、ある種の戦略は自分たちの周囲には見つけにくいことに気がついた。彼らはそれに「違和感を感じる」と記したのであるが、それらははからずも日本の伝統的価値観に反するような戦略であった。ここにおいて学生たちは、アメリカ的対人関係の表現の仕方と、日本的対人関係の表現の仕方の違いを実感したのであった。

これら2つのクラスはポライトネスを中心にしたものではないが、授業の一部を割いて簡単に導入しただけでこのような成果が得られたことは、学生の英語能力向上の点でもまた彼らの国際的視野を広げる点でも効果があったと思う。同時に母語である日本語を客観的に観察することを学んだことにより、無意識で受け入れている日本的習慣や社会通念を異文化の目で眺め

る機会を得たことは、学生の将来に大きな広がりを与えることになったと思う。

注

- 1) 本稿の一部は2006年8月と9月、2つの学会で口頭発表した。言語学レポートの日本語の例文はニュージーランドの Language and Society Conference において、またゼミ・レポートの学生の感想は本学で開催された大学英語教育学会全国大会において発表した。
- 2) 匿名査読者2名から好意的かつ有益な示唆を頂戴したことに深く感謝する。

参考文献

- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 堀 素子「英語圏社会における Politeness 概念——日本社会との対比——」(1996)『東海女子大学紀要』15: 37-66.
- Hori, Motoko (1999) Changing society, changing language. *Bulletin of Tokai Women's College*, No. 19, 23-51.
- 堀 素子「Politeness 理論再考」(2002) 関西外国語大学『研究論集』75: 169-184.
- Hori, Motoko (2004) An analysis of language use in Japan viewed from Brown and Levinson's politeness theory. *Journal of Inquiry and Research*, 79: 149-167. Kansai Gaidai University.
- 堀 素子・津田早苗・大塚容子・村田泰美・重光由加・大谷麻美・村田和代・共著『ポライトネスと英語教育：言語使用における対人関係の機能』(2006) 東京：ひつじ書房。独立法人学術振興会平成17年度科学研究費補助金による研究成果公開促進費（課題番号175152）による出版。大学英語教育学会（JACET）2006年度学術賞受賞研究書。
- 堀 素子「英語の慣用的間接依頼表現」(2006) 関西外国語大学『研究論集』84: 57-74.

(ほり・もとこ 外国語学部教授)